

# 温故知新

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(15) 平成13年1月15日

静岡の文化人(その4)

## 儒学者・林羅山と『丙辰紀行』

林羅山は天正11(1583)年京都四条新町(中京区新町)に生まれました。名は信勝、号は羅山、のち出家・剃髪して道春と称しました。幼少より書物に親しみ、8歳にして『太平記』を読むのを傍らで聞き暗誦する程、記憶力は抜群でした。22歳の時藤原惺窩に入門し学問・知識のみならず正しく生きる道を学び、慶長10(1605)年23歳の時徳川家康に京都二条城で初めて拝謁し、それ以降側近の学者として仕えました。家康は秀忠に將軍職を譲り駿府に移ってから、羅山を重用し土地・資金・俸禄を与え、また駿府城外堀端(静岡市西深草町)に道春邸を建て住ませ、慶長13(1608)年26歳の時駿府城内駿河文庫の圖書の管理を任せました。家康の死後駿河文庫は將軍家と尾張、水戸、紀伊の御三家に「駿河御譲本」として分配されました。また政治・軍事のみならず文教政策にも優れ、学問の重要性を認識していた家康は、羅山と金地院崇伝に命じ慶長20(1615)年『大蔵一覽集』を、そして翌元和2(1616)年『群書治要』を銅版活字「駿河版」10万字を使用して印刷、刊行させました。

『大蔵一覽集』(K070/5)11巻125部は仏教全書である『大蔵經』の仏教教養の要文を抄出・分類編纂した索引書で、中国明代の陳実の著。また『群書治要』(K074/1)は中国唐代の太宗の名臣魏徵の著で多くの典籍中から政治の規範となるべき君臣の原稿を抜粋、編集したもので50巻から成ります。駿府で印刷されたものは、もともなった金沢文庫本に欠巻があるため3巻不足の47巻。この駿河版活字はのち紀州徳川家に移され、現在凸版印刷会社に所蔵され、国の文化財に指定されています。

元和2(1616)年家康没後は秀忠、家光、家綱に仕えました。明暦3(1657)年江戸の大火により神田の羅山の邸も罹災し貴重な蔵書も焼失しましたが、これに同情した將軍家綱は紅葉山文庫蔵書より多数の圖書を下賜したため、林家では將軍家よりいただいた本として、これに「恩賜官本」の印を押しました。林家の蔵書は代々受け継がれた後、その一部は昌平坂学問所に移管され、明治元(1868)年徳川家の駿府移封に伴い府中学問所(駿府学校)に移されました。この恩賜官本全60部のうち26部319冊が当館葵文庫に所蔵されています。尚、恩賜官本の詳細については、静岡県立中央図書館報『葵』(SZ01/3)10号「恩賜官本考」(石田德行)に記述されています。

羅山が元和2(1616)年著した紀行文に『丙辰紀行』(K381/13)があります。その内容は、江戸武蔵野から東海道を經て相坂(逢坂)の関(滋賀県大津市)までの名所・旧跡案内で、50項目を立て、項目ごとにその地の史話・伝説などを略記し、自作の漢詩を感想として添えています。静岡県関係は伊豆の「走湯山」から遠江の「塩見坂」までの24項。特に駿府に関する部分は「久能山」「久能宮」「駿河文庫」「浅間」「臨濟寺」「建徳寺」「八幡」についてその歴史や由来・伝説が記されています。

### 【参考文献】

『人物叢書118 林羅山』(281.08/101)

『叢書日本の思想家2 林羅山』(121.08/108)

『丙辰紀行』(K381/13)「久能山」の部分